

サービス生産（労働）過程の特性

——飯盛信男氏の見解と他説批判を巡って——

斎 藤 重 雄

第1節 課題

(1) 飯盛氏の功績と理論問題

飯盛信男氏は、日本における現代サービス経済に関して最も息の長い現役の研究者であり、しかもその業績、そして功績は枚挙に暇がなく、この界をリードしてきた重要な1人であり、同氏の研究の意欲と功績に触発された研究者は枚挙に暇がない程である。そう言う私もその1人である。この度、飯盛氏は佐賀大学を定年退職されると聞く。この退職は、氏の研究の1つの節目であり、今後の研究の1つの里程碑を意味していよう。したがって、氏の研究は、愈々これから本番を迎えるものと確信し、かつ切望する。

氏の研究成果に若干立ち入れば、これは大枠的には、現代サービス経済の理論——サービス経済の学説史を含む——と現状分析、これらに基づく政策論の3つからなる。そして、このうち、現状分析と政策論は、氏の独壇場の感さである。氏のサービスの経済理論は、概ね比較的若い時代に形成されたものである。

その時代から、通説——^{かりそめ}仮初的な学界的常識——であることに^{あぐら}胡坐をかくのとは対照的に、むしろ通説をいわば敵に回して理論的挑戦を企てたことは天晴れであり、私は何よりも氏のこの姿勢に触発された。真理の発見は、迫害された地動説の提起がそうであったように、一般に最初は少数意見であることが想起させられる。

ところで、飯盛氏の研究の意欲と姿勢に触発されたとは言え、氏の多数の業績の中で最も肝心の氏のサービス経済の理論には基本的問題が含まれている。氏が本番を迎えるであろう今後の研究に鑑み、小論ではこの問題を、氏の検討材料として指摘する。そのための主要な材料を氏の最新の論稿⁽¹⁾に求

める。

注(1) 飯盛信男「サービス部門の労働過程特性」(本誌, 第44巻3号, 2011年11月)。なお, この表題は, 今年度の経済理論学会での飯盛氏の報告テーマと同名である。

(2) 理論問題

飯盛氏の論稿は, 表題の「サービス部門の労働過程特性」をテーマとし, 大枠的には2つからなる。1つは飯盛氏の見解であり, もう1つは, これを基とする, 他説の批判である。結論を先取りすれば, 氏の見解は当を得ているとは思われない。だから, 氏が対象とする他説に問題があっても, 氏の批判も殆ど当を得ていない。

以下では, 氏の見解が, その論証に欠ける言いつ放し, 見方を変えると独り善がりであり, 論理的に成立しないこと, また氏には未踏の領域があること, 同時にこれらが克服されれば, 氏が新たな理論的境地に達することを明らかにする。

私信の形ではあるが, 「寄稿」(投稿) 依頼の際に, 「私の説への批判を書いていただきたい」との氏の添書きがあった。これは, 飯盛氏の研究者としての度量の大きさを端的に意味するものである。これに感服すると同時に, これが学問を発展させる大道にして王道であるので, これに呼応すべきであると考へ, 以下では, 氏の見解に含まれる問題を忌憚なく指摘し, 回答の願望も記す。

以下に述べることは, 第4節を除けば, 飯盛見解を巡る最近——ほぼ2年以内——の3つの拙稿⁽²⁾で述べたことと殆ど重複する。とは言え, この諸拙稿への氏の回答は未だないので, 小論が載る同誌の同号において氏が回答されることを願って, 小論を, 枚数制限を大幅に上回って提出することとした。

なお, 以下での〔 〕内は私による補足を意味し, また引用文中の……は省略を意味する。

注(2) 拙稿, ①「剰余価値生産とサービス労働——森田成也氏の見解に寄せて——」(『経済集志』80巻3号, 2010年10月), ②「サービス概念と生産的労働——飯盛信男氏の回答を巡って——」(同前, 80巻4号, 2011年1月)における「補論1 飯盛見解の問題点」, ③「『接

客労働』とサービス労働——飯盛信男氏の見解と鈴木和雄見解へのコメントを巡って——」
 (同前81巻2号, 2011年7月)。

第2節 問題の概要

氏の見解の基本的な問題は、概念には程遠い氏の「サービス」にあり、これに関わる他にも見ることができる。そして、氏の問題は、重複するが、氏の「サービス」を含む、以下の5点として抽出される。ここでは、これらが問題であることを指摘するに留め、なぜ問題であるかについては次節以降で明らかにする。

第1に、氏の「サービス」は、マルクスの運輸論の1つである「有用効果生産説」での「有用効果」(177ページ、以下ではページを省き、数字だけとする)である。氏は、これを「非有形的使用価値」(171)や「無形生産物」(175),「無形の使用価値」(177),「無形の生産物」(179)とする。そして、その「特性」・「特質」を「生産と消費の同時性」(173)に求める。また、その所在は「人間の外」(168)であるととする。

第2に、氏は、労働対象を「生産物の物質的基体＝原料」(171)に限定する。この結果、氏の「サービス」に関する最たる特徴——つまり、氏の表題でもある「サービス部門の労働過程特性」——は、「サービス労働の対象となる人間」(170)に見るように、「労働の対象」の存在を認めながらも、「労働対象（原料）は存在せず」(174)とすることにある。しかも、サービス生産での「労働の対象」を、専ら「サービスを購入する……消費者」(同前)として捉えている⁽³⁾。

第3に、飯盛氏は、氏の「対物サービス」(175)に見るように、「対物サービス」なるもの——これは、サービス経済論争での1つの論点であるマルクスの *Naturaldienst* [物的役立ち・対物的役立ち] に該当しよう——をサービスと捉えている。予め、これについてだけ指摘すれば、これは決してサービスではない。

第4に、上記を総括する、氏の「サービス部門の労働過程」——実は生産過程——は、今回は明記されていないが、他説批判の前提をなしているので、氏の他の稿で確認すれば、「第一に」で指摘したマルクスの有用効果生産説における、「G—W……P—G'」なる範式で示される⁽⁴⁾。また、再確認になるが、この

「労働過程」の「特性」は、「第2に」で指摘したように、労働対象の不在である。

第5に、「第1に」での氏の「サービス」と「第2に」での労働対象に関わるが、他説——「斎藤・樺田見解」——の批判において、「労働力は……再生産されるものであって生産物ではない」(171)とし、また「それ〔労働力〕は擬制的商品として売買されるに過ぎない」(同前)とする。

なお、氏は、「現代資本主義の腐朽性、寄生性を……流通部門の肥大化に見る」(179)と言い、注の(15)で私見に言及している。

注(3) その別表現は、「サービス資本循環において人間が登場するのは、その販売段階でのサービスの購入者すなわち消費者としてである」(170)に見る。

(4) この範式は、最新に近い飯盛稿では、「接客サービス労働の労働過程——鈴木和雄氏の諸論稿の検討——」(『佐賀大学経済論集』43巻5号、2011年1月)、143ページに示されている。

第3節 問題の検討

以下、飯盛見解における理論的問題に立ち入る。

(1) 氏のサービス概念

① 典拠の問題 飯盛氏のサービスは、自ら言われるように、マルクスの運輸論での「有用効果」——実は、その言葉に反する、運輸手段の機能である「有用な作用」——であり、運輸過程の範式、「G—W……P—G'」における「……P」, すなわち生産過程(……)とこの過程で機能する資本(P)である。

だから、飯盛氏のサービスに関する「無形使用価値」での「使用価値」と「無形生産物」での「生産物」は生産物の生産であり、生産物と捉えることは論理矛盾である。既に明らかであろうが、念のために立ち入れば、使用価値と生産物——ただし、以下では使用価値だけを取り上げる——は、労働力の使用価値——これは、その使用である労働と区別される——がそうであるように、使用あるいは機能以前に、固定状態で実在しなければならないが、飯盛氏においては、使用や機能——生産過程で機能する資本P——を使用価値、そしてサービスと捉えている。念のために指摘すれば、使用価値とその使用・機能は次元を異にす

る。

これは、氏の見解の典拠をなすマルクスの「有用効果生産説」が抱える問題——この問題にはここでは立ち入らないが、1つの問題を指摘すれば、既述したように、「有用な作用」を「有用効果」とし、真の有用効果、つまり成果を捉えていないことにある。したがって、彼のもう1つの運輸論である「使用価値完成説」も問題を抱えるが、これよりも論理的に劣っている——をそのまま飯盛見解の根幹に据えていることを意味する。見方を変えれば、サービスを含めて、生産物は生産の成果や結果であるが、飯盛氏はそのように捉えずに、サービスの生産過程をサービス生産物と捉えている。しかし、生産過程と生産物は、いわば原因と結果であり、大いに関係はするが、双方は、この関係の中では別次元であるので、峻別されるべきである。

② 不等価交換 序に指摘すれば、「P—G'」は不等価交換である。しかし、飯盛氏には、不等価交換の認識さえ欠けている。ところで、「P」を「P'」とすれば、不等価交換は解消するが、既に指摘したように、Pをサービスと捉えるところに基本的問題がある。

③ 財貨とサービスの一般的規定 飯盛見解を離れるが、後の議論のために不可欠なので、財貨とサービスの一般的規定を、できるだけ簡潔に述べておく。この世に実在する総ては、一元的に自然であるが、基本的に自然としての自然と人間としての自然、つまり自然と人間に区別される。人間と自然の区別は、人間が最高度の意識を有することによる。しかも、人間の生存は自然の存在を絶対的に前提とするので、自然を基層とし、人間——人間の集合としての社会——を上層とする、階層関係が存在する。

人間の生存には、第1に、自然の存在を前提とするだけでなく、自然の活用が不可欠である。そして、人間は、高度な意識——高度に発達した物質（脳髓、とくに大脳）の作用——を以て自然を活用する。この活用が財貨の生産であり、その成果が財貨（物質的生産物）——基本的には食住衣——である。また、この生産での人間の主体的活動が物的・対物労働であり、自然が労働対象である。しかし、人間の生存には財貨の生産だけで事足りるのではない。

人間の生存には、第2に、生殖と出産、養育、人間的諸能力の発展と維持が不可欠である。これらのうち、高度な意識を以て行われるものが人間の生

産であり、その成果が人間である。また、この生産での人間の主体的活動が人的・対人労働であり、人間が労働対象である。そして、人間の生産が財貨の生産と対比・対置されたサービスの生産であり、その成果がサービスである。

かくして、財貨とサービスは、自然と人間の階層性に規定されて階層性を有する。つまり、財貨がなければ、サービスは存在できない。とは言え、この階層性は、財貨がサービスに先行的に存在することを意味しない。つまり、財貨とサービスは、人類の誕生時から、またそれに類するものはそれ以前から、同時並存していた。

このように、財貨とサービスは、それらの表象を分析し、自然と人間の基本的関係や労働対象の違いと言う基本から捉えられて初めて概念的に明確となる。だから、表象を任意に捉えて記述しても、概念を規定したことにはならない。

(2) 労働対象

① 論証の欠落 飯盛見解の最たる特徴であるサービス労働対象の不在は、氏が労働対象を自然素材に限定し、自然素材ではない人間や労働力を労働対象から排除したことによる。だから、氏は「労働の対象は労働対象であるとは限らない」という、氏以外には理解不可能なことを言われる。最大の問題は、氏が、労働対象が自然素材に限定される論拠——見方を変えれば、人間が労働対象あるいは主要材料から排除される根拠——を挙げていないこと、したがって論証していないことにある。

飯盛氏は、労働対象の存在を否定するが故に、この対象に結実する、したがって人間の内部に存在する生産の成果（生産物）を捉えることができず、「無形生産物」なる言葉だけが残り、しかもこの「無形生産物」は労働対象である「人間の外に存在〔する〕」としている。

② 無縁な論拠 この論拠に付言すれば、自然素材としての労働対象を主要材料と補助材料に区分しても、これは、人間を労働対象から排除するその論拠とは全く無縁である。また、労働対象としての人間を単に「消費者」とすることも、その論拠とは無縁であり、事柄の一面的把握である。

(3) 「対物サービス」

① 物質的生産 飯盛氏は、社会的分業による自立的・専門的な活動としての、例えば機械の修理や工場の清掃、部品の委託加工、貨物の運輸、等を「対物サービス」と捉え、俗流の見解と軌を一にする。しかし、「対物サービス」なるものは、自然素材を労働対象とすることの延長線上にあり、したがって物質的生産の一部あるいは一環であり、サービスとは無縁である。

見方を変えれば、結果的には、氏が「対物サービス」なるものをサービスの一部として捉えたいがために、労働対象を1つに限定できず、客観的にはサービス生産には労働対象が存在しないと、闇雲に言っているに過ぎない。

因みに、氏が依拠するマルクスの1つの運輸論の有用効果生産説での労働対象は、旅客と貨物の混合であり、労働対象が二元的である。

② 「対物サービス」の労働対象 上記を補足する意味で、看過できない、氏のつぎの一文を見る。ここでは、サービスでないものにサービスが付されていて紛らわしいので、できるだけそれには目を瞑り、見ない方が良い。

「〔 α 〕修理、輸送など物財関連のサービスも物財そのものをうみだす活動ではないから、サービス対象となる物財は原料、労働対象ではなく、……。〔 β 〕なお対物サービスのばあいサービスの生産と消費は時間的にも空間的にも分離している。〔 γ 〕そして、対人サービス、対物サービスとも消費手段としても生産手段としても機能する。〔 δ 〕この基準からはサービスは、対個人サービスと対企業サービスに区別される」(175)。

第1に、 α での修理や輸送は、確かに「物財……をうみだす活動ではない」が、修理される機械や運輸される貨物は、「労働対象ではなく」に反し、明らかに労働対象である。氏は、機械の修理や貨物の運輸をサービスであると勝手に決め付けているために、そこには労働対象がないと、強引に言っているに過ぎない。

元来、労働対象のない労働は存在しない。換言すれば、労働だけの労働は存在しないのであり、対象があつて初めて労働が生まれる。修理労働や運輸労働も例外ではない。飯盛氏はこうした基本認識を欠いている。

機械の修理に立ち入れば、故障した機械は、放置されれば使用不能であり、産業廃棄物になるだけでなく、代替的な機械の生産を要することになる。し

かし、修理は、故障した機械を使用可能とし、本質的に、代替的な機械を生産したのと同じ意味を持つ。だから、機械の修理は機械生産の一種であり、サービスとは無縁である。したがって、「対物サービス」なるものは、飯盛氏もそうだが、「物財……をうみだ〔さない〕活動」との誤解を内容とする、実に雑なものである。貨物の運輸にも一言すれば、これは、貨物の所在変換によって物質的使用対象を使用可能にするという物質的生産の一般的規定に合致するのであり、サービスとは無縁である。

第2に、 β で、例えば機械の修理は「生産と消費は時間的にも空間的にも分離している」となるが、これは飯盛見解内部の矛盾である。なぜなら、飯盛流では、修理活動が生産であり、修理活動の受用が消費であるので、時空的に同一である。だから、「分離している」は自己矛盾である。

第3に、 γ は、例えば氏の「対人サービス」である整髪活動が「消費手段としても生産手段としても機能する」ことを意味する、しかし、整髪活動が「生産手段として機能する」とは皆目分らない。

第4に、 δ に関しては、「この基準」が不明なので、その全体が意味不明である。

要するに、氏は「対物サービス」——実は物質的生産の一種——でも労働対象は存在しないとするが、故障した機械や輸送される貨物は、誰が見ても修理労働や運輸労働の物的対象である。だから、氏は、存在していない氏の論拠を明確にする義務を負っている。

念のために指摘すれば、物的対象の所有関係——ここでの事例では、修理労働や運輸労働の物的対象が修理者や運輸者の所有物でないこと——は、労働対象が存在しないことの論拠の欠片にもならない。

(4) 「サービス部門の労働過程」

飯盛氏の「サービス部門の労働過程」は、既述のように、「G—W……P—G'」であり、また労働対象の不在を内容とするが、以下に指摘する重要な中身が欠けている。この中身は2つからなる。以下、これに立ち入る。

① 労働対象 まず、労働対象が範式においてはいわば隠れていることである。サービス労働対象である人、限定的にはこの人間が有する諸能力の統

合である労働力は、サービスの生産では商品でも資本でもない。だから、商品、むしろ資本に限られている「G—W」での「W」、とくにその中のPm（生産手段）には含まれない。しかし、Pmに含まれない言うことは、サービス労働対象が不在であることを意味しない。つまり、存在はするが、後の範式に見るように、《Ⅱ・A》——これについては後に指摘するが、この段階でも指摘すれば、Ⅱ・Aは、労働対象としての人間と労働力であり、《 》は、それらが隠れていることを意味する——としていわば隠れているのである。

② 生産の担い手 つぎに、労働対象（Ⅱ・A）も生産の担い手だと言うことである。飯盛見解では、サービス労働対象に該当する人間を、専ら「サービスを購入する……消費者」(174)として捉え、大なり小なりサービスの生産者、より正確には共同生産者としては捉えていない。これは、サービス生産の重要な内容の看過である。

この点は、重要なので、事例を以て説明する。最も典型的な事例は、生徒・学生が教育において生産的な役割を担うことである。つまり、教育では教師の役割が重要であるが、生徒・学生の主体性——学習意欲——が決定的に重要である。しかも、教師の役割としては、生徒・学生の主体性を高める上での努力が不可欠であり、授業や講義での導入部が重視される所以である。より典型的な事例は、コーチと選手の関係に見ることができる。つまり、選手の能力を伸ばすのは選手自身であり、コーチはその補助者である。

そして、その成果は、労働対象である生徒・学生の内部に存在し、教師によって所有されない。一般に、サービス生産者は、このサービスが商品である場合は、何も所有しないのではなくも、支払請求権を所有する。

③ 帰結 しかし、飯盛見解では、これらのことが全く抜け落ち、したがってサービス経済論としては重要な中身が欠落しているので、サービス経済論のいわば試金石となる「集団的サービス」を扱うことは不可能である。

参考までに、集団的サービスに一言すれば、集団的サービスでは、労働対象——その典型は、興行での客数——が多くなればなる程、サービスの使用価値と価値は、比例的に増大する。しかし、飯盛氏のように、サービスを「……P」と捉えると、これは一定量であり、比例的増大を捉えられない。肝心なことは、サービスをサービス労働対象に即して、その内部に固定状態で存在する

ものとして捉えることである。なお、「精神的生産」(175)についても同様であるが、今回はこれには立ち入らない。

(5) 労働力

① 生産物 労働力を巡る飯盛氏の今回の見解も理解不可能である。つまり、既に見た「労働力は……再生産されるものであって生産物ではない」は理解不能である。端的には、「再生産される」と「生産物ではない」の関連が理解不可能である。見方を変えれば、氏の見解は、(再)生産があっても、その成果である(再)生産物が無いと言うものであり、理解不能である。

ところで、(再)生産されたものは(再)生産物である。したがって、氏の文言にできるだけ即して述べれば、「労働力は……再生産されるのであって」、その帰結である「再生産され[た]」労働力は、正に一種の「生産物で」ある。そして、これは理解可能である。かくして、上に引用した氏の見解の記述は、理解できないだけでなく、形式論理的に見ても誤りである。

② サービスの特性 飯盛氏は、サービス資本が生産する生産物は、労働力——より一般的には人間的諸能力——ではなく、サービス——氏の「無形生産物」——であり、消費者は、生活手段の購入と個人的消費と同様に、このサービスを購入して個人的に消費して、労働力を再生産すると言いたいのである。しかし、これは、サービスの重要な特性を捉えられない飯盛氏が、サービスを生活手段と同一視したことによる。

立ち入れば、既に指摘したように、サービスの生産は、大なり小なりサービス生産者とその対象者との共同生産であり、その際に対象者は生産者のサービス活動を生産的に消費する——したがって、対象者は一種のサービス生産者である——のである。だから、その成果としてのサービスは、大なり小なり生産者との共同生産物なのであり、対象者の内部に生産されて固定状態をなし、その後それを個人的に使用・消費する。そして、これらがここで言うサービスの重要な特性であり、既に触れた「集団的サービス」を捉える際に重要となる。

したがって、氏の「サービスの生産と消費の同時性」なるものは、俗流見解と同じであり、噴飯物である。つまり、消費は生産の後であり、「同時」は

成立しない。なお、生活手段であれサービスであれ、これらの個人的消費過程は同時に人間・労働力の生産・再生産過程であり、単なる消費過程ではない。

③ 擬制的商品 序に指摘すれば、飯盛氏は、既に見たように、「それ〔労働力〕は擬制的商品として売買されるに過ぎない」と言われる。労働力商品の売買に関するマルクスの見解には、一見すると、2つある。1つは、通説的な「労働力商品の売買」である。これは、見方を変えれば、労働力所有権の売買である。しかし、マルクスは、「所有権を放棄しない」と言って、所有権の売買を否定している。しかも、所有権の売買としての「労働力商品の売買」は資本制では実在しないので、これを実在すると捉えることは見做し以外のなものでもないので、所有権売買としての労働力商品は擬制的商品を意味している。

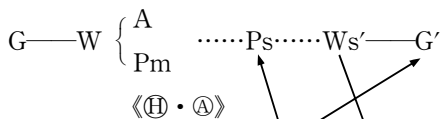
マルクスのもう1つは、労働力占有権の売買、つまり労働力の賃貸借である。これは、労働力商品の売買の1つの形態であり、マルクスの真意である。そして、賃貸としての労働力商品は実在するので、見做す必要はない。だから、擬制的商品ではない。飯盛氏は、自らの見解がどちらの売買であるかを、論拠と共に明記すべきである。

第4節 サービス資本の範式と労働力の生産・再生産

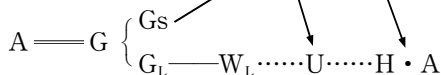
これまで述べてきたことを補足する意味でも、飯盛氏が今回取り上げられた、樺田豊氏の2つの「循環定式」に触発されて、これに対応する、私が考える2つの範式を掲げる。ここでのいわば目玉は、労働対象を明記したことにあり、これが検討材料となれば幸いである。

樺田氏の2つの定式と私の2つの範式は、掲載順が逆になっているが、これは、どちらが適切であるかと言うものではない。なお、ここでサービス資本の範式を先に扱った理由を敢えて言えば、サービスの資本制的生産が支配すると言う前提の下で、労働力がそれとの関連で如何に生産・再生産されるかを捉えることにある。

【サービス資本の範式】



【人間・労働力生産の範式】



〔記号と線〕 P_s ：サービス生産資本 W_s ：サービス商品 $\text{Ⓔ} \cdot \text{Ⓐ}$ ：非商品としての労働対象の人間・労働力 G_s ：サービス購入用貨幣 G_L ：生活手段購入用貨幣 W_L ：生活手段 U ：消費活動＝個人的消費 = ：賃貸借 \longleftrightarrow ：共同生産 \longrightarrow ：存在
他の記号や線は、周知のもの

(1) サービス資本の範式

第1に、サービス資本の範式であるが、これは一目瞭然であるので、とくに説明を要さない。とは言え、《Ⓔ・Ⓐ》については、再説的であるが、指摘しておくべきである。これは、サービス労働対象は、一般に商品ではないので、 P_m （サービス生産手段）には入らないが、それが存在することである。飯盛氏は、このことを理解できないために、サービス労働対象である「自分自身を労働対象（原料）として資本家に販売するのではない」と言うに留まっている。なお、念のために指摘すれば、誰も「……販売する」とは言っていない。

ところで、氏は、氏が肯定的に扱った長田浩氏の見解での「③サービス〔労働〕対象（顧客の頭）」(173) を見ているにも関わらず、闇雲に「サービス部門では労働対象（原料）は存在せず」(174) と言っている。このことは、氏が非商品としての労働対象の存在を把握できていないことを意味している。

(2) 人間・労働力生産の範式

第2に、労働力生産の範式では、まず、労働力（A）を賃貸（＝）することによって貨幣（G、貨幣賃金）を取得し、その一部（ G_s ）をサービス（ W_s' ）の購入に当てる。ただし、この購入には、前払い—その典型は授業料や興行料金—と後払い—その典型は従来の整髪料—がある。また、「 $G_s \rightarrow G'$ 」だけを見

ると、不等価交換に見えるが、剰余価値あるいは利潤を含むサービスを購入するであり、等価である。

つぎに、賃金の他の一部によって生活手段 (W_L) を購入し、消費活動 (U) を行い、人間、とくに労働力を生産・再生産するが、消費活動の際に、サービス生産資本 (Ps) と大なり小なり共同的にサービスの生産を行う (\longleftrightarrow)。そして、共同生産の際に、労働対象の⑩・④が存在する。その結果、生産された共同生産物としてのサービス (Ws') は、生産・再生産された人間 (H)、とくに労働力 (A) の内部に、その一部として固定状態で存在する (\longrightarrow)。したがって、資本である Ws' は、実体的には、サービス購入者への支払請求権としてのみ存在する。

(3) 真のセルフサービス

サービスの生産は資本に固有ではなく、小生産としても行われるが、重要なことは、いずれの際にも真のセルフサービスが行われることである。真のセルフサービスは、サービスの生産者と労働対象が同一であり、その成果としてのサービスが自己の潜在的能力の混在化である。そして、この顕在化は、これが無償で行われても、労働力に関することであれば、高賃金に反映される。立ち入らないが、ここには賃金の本質が関わっている。

立ち入らないと言ったが、肝心な一点を指摘すれば、賃金は労働力の使用価値の需給関係での価格であり、労働力の価値とは直接的にではなく、間接的に関係する。だから、労働力の価値が賃金を規定すると言う通説的解釈は、論理の初期的段階では許されても、論理の展開においては廃棄されるべきである。むしろ、賃金が労働力の価値を規定すると捉えるべきである。

「直接的に」や「間接的に」が出た序に、飯盛氏の「労働力の価値はその再生産に必要な生活手段（物財プラスサービス）の価値によって間接的に定まる」(171) に一言する。2つの問題がある。1つは氏の「労働力の価値」にある。「労働力商品擬制説」に立つ氏は、この「労働力」が資本制でののであれば、また氏が「価値＝商品価値」論に立つのであれば、「労働力の価値」を口にできない筈である。なぜなら、氏の「労働力の価値」は、いわば「労働力擬制商品の価値」であり、実在せず、見做しに過ぎないからである。

もう1つは、「間接的に」にある。飯盛氏は、他面では、労働力価値のいわば外在説である。つまり、労働力の価値とは言っても、この価値は労働力の内部にはなく、外部に存在する、すなわち労働力の再生産に要する「生活手段……の価値」として存在すると言う見解である。そうであっても、「間接的に」は不適切であり、「外部に存在する」が適切である。とは言え、「外部に存在する」と捉えること自体がナンセンスである。なぜなら、使用価値と価値は常に統一的に存在するので、労働力の使用価値が労働力の内部に存在し、労働力の価値が労働力の外部に存在すると捉えることは、論理の分裂であり、成立しないからである。

第5節 飯盛氏の他説批判

(1) 「労働力商品擬制説」

飯盛氏が真っ先に問題にしたのは、サービスの生産を巡って、人間を労働対象と捉える見解が増大している近況に触れ、その中で鈴木和雄氏の見解が鈴木氏の「労働力商品擬制説」と矛盾するということである。まず、鈴木氏が、飯盛氏が言われるように、「労働力は実在の生産物ではな [い]」(166) と捉えているのであれば、飯盛氏の論評はないが、これは問題である。なぜなら、そうであれば、労働力の生産・再生産も擬制に過ぎず、労働力の生産・再生産ということ自体が問題だからである。この生産・再生産が擬制でなければ、その帰結は生産物である。

つぎに、労働力商品擬制説は、通常言われている労働力の所有権の売買について言うのであれば、所有権——とくに三権の中の、廃棄や譲渡としての処分権——の売買は資本制では一般に存在しないので、そして存在すると見るのは見做しであるので、この限りにおいて適切である。これに対して、労働力の売買をその占有権の売買、つまり労働力の賃貸借と捉えているのであれば、これは実在するので、したがって見做す必要はないので、そう捉えることは擬制説ではない。しかも、飯盛氏は他の稿で、鈴木氏が賃貸借と捉えていることを指摘している⁽⁵⁾。したがって、労働力の賃貸借を考慮した場合に、鈴木見解を「労働力商品擬制説」であると言えるかは疑問である。

ところで、飯盛氏は、氏自身の見解が労働力商品擬制説であると言う場合に、その論拠を明記すべきである。端的には、労働力商品の中身が労働力の所有権の売買か、占有権の売買（賃貸借）かを明らかにすべきである。

注(5) 飯盛、前掲「接客サービス労働の労働過程」、136ページ。

(2) 労働対象

氏の一文に、つぎのものがある。既述のように、〔 〕内は私による。

「〔 α 労働の対象の〕人間はサービス資本循環における労働対象（原料）として購入されるのではない。〔 β 〕サービス労働の対象となる人間が労働対象となるということであれば、人間が原料として購入され生産過程において労働を加えられ、新たな生産物に帰結するということではなければならない。〔 γ 〕これは動物の飼育や植物の栽培について生ずることである」(170)。

まず、 α は適切である。とは言え、 α は、既述のように、「〔労働の対象となる〕人間」——あるいは「労働対象となる〔人間〕」——が存在しないことを意味しない。

つぎに、 β は、適正な α を活かして、「〔 β' 〕サービス労働の対象となる人間が労働対象となるということであれば、人間が原料として購入され〔ずに、〕生産過程において労働を加えられ、新たな生産物に帰結するということである……〔ある〕」と書かれるべきであった。このように、「〔ずに、〕」を加えれば、 β' は α と整合する。換言すれば、「〔ずに、〕」が欠落しているために、 β は、 α と整合しないだけでなく、それ自体が成立しない。

さらに、 γ は、例えば「これは動物の飼育や植物の栽培〔、子供の養育〕について生ずることである」と書かれるべきであった。つまり、幼児・子供には養育が不可欠であるが、養育の結果としての順調な成長状態や自立可能となった大人と言う一種の生産物、また教育の結果、潜在的な知的能力が顕在化し、発展した知的能力と言う一種の生産物（成果）が生み出されるのである。これらの生産物は、種類や形態を著しく異にするとは言え、労働生産物としては飼育された動物や栽培された植物と同じである。ただし、養育や教育の成果は、日常用語的には生産物と言われていない。しかし、これは事柄

の本質を見ない日常用語の限界であり、これに依拠すべきではない。

第6節 課題の提起

(1) 労働対象

むすびに代えて、飯盛見解の根幹に関わる、氏に回答願いたい諸点を掲げる。

第1に、労働対象には、自然素材と人間（非自然素材）の二種があるが、氏が自然素材だけが労働対象である論拠を明示することである。その際に、既に指摘したが、自然素材を主要材料と補助材料に区別しても、この区別はその論拠の欠片にもならない。なぜなら、サービスの生産では、人間も主要材料、つまり一種の原料になっているからである。そこで、飯盛氏は、単なる独断ではなしに、人間を労働対象として頑なに認めない論理整合的かつ説得的な理由を、定年退職の記念碑として是非とも開示願いたい。

念のために指摘すれば、まず、労働対象の商品性はこの理由と無関係である。つぎに、金子ハルオ氏の「消費過程」(172)——これに対する飯盛氏の扱いは極めて曖昧であり、自説に与しそうな見解なら無批判的に利用する気配が感じられる——に依拠することは、何の役にも立たない。なぜなら、金子氏は、氏の Dienst の解釈に囚われてサービスの生産過程を闇雲に塗り潰し、そこに「消費過程」と書いているに過ぎず、噴飯物だからである。因みに、物質的生産物の生産過程も生産諸要因の消費過程であるが、この消費過程は生産過程の否定——したがって、労働対象や労働手段の存在の否定——を意味しない。

飯盛氏の探求を見守ることにするが、この探求的努力は徒労に終わり、無為に等しくなろう。これに対して、氏が「労働の対象」と「労働対象」が同義であることに気が付けば、目下の飯盛見解の根幹を揺るがすことになるとは言え、つぎに指摘する問題も解決されるので、前途が間違いなく拓けてくる。そのためには氏の脱皮・脱殻を不可欠となるが、そのための勇気は生来氏に備わっていると確信する。

(2) 「有用効果」と無形生産物

第2に、労働対象を巡る問題と関連するが、これと一応切り離して指摘すれば、マルクスの運輸論での「有用効果生産説」での「有用効果」がどうしてサービスであるのか。これは、内容的に有用な作用——別言すれば、マルクスが盛んに使用した Dienst（役立ち）の一種である。そして、彼の Dienst はサービスと同義ではない。そもそも、マルクスはサービス概念を確立していない——に過ぎない。それは、氏のサービス理論が成り立つか否かを決する事柄である。

若干立ち入れば、マルクスは、労働対象あるいは運輸対象である貨物と旅客の双方を掲げはするが、この労働対象に即して論理を展開せず、専ら運輸手段に即して、その機能・作用として展開している。これは、運輸論としては甚だしい片手落ちであり、運輸論に値しない代物である⁽⁶⁾。

かくして、サービス概念を確立するためには、金子ハルオ氏の場合は、安易に依拠したマルクスの Dienst——これをサービスと捉える論者が少なくないが、概念としてのサービスに程遠いので、単に役立ちと捉えるべきである——の呪縛から——つまり、Dienst を以て現実を解釈することから——解放されるべきであるように、飯盛氏の場合は、マルクスの運輸論での「有用効果」の呪縛から解放されるべきである。そして、マルクスのそれを批判的に捉えると同時に、自分の目と頭脳を使って現実を直視して分析し、サービスの本質を抽出し、概念を確立すべきである。

序に指摘すれば、「無形生産物」や「非有形的生産物」、「無形使用価値」、等の用語は使用すべきではない。なぜなら、これらは、その内容が実に曖昧模糊としたものだからである。俗流的な見解——俗流の根本は、経済の基本である労働力と労働を区別できないことと非歴史性にある——でも、intangible の訳語として、同じような用語が使用されているが、これも曖昧模糊である。文字通りの「無形」や「非有形」は事実と反する。なぜなら、無形・非有形であれば、視覚に訴える興行は成立しないからである。また、「無形」、等が人間としての非物質であれば、これは的確である、しかし、これは、飯盛氏の場合は、「対物サービス」——[物的な「無形生産物」なるもの]——と対立する。だから、「対物サービス」の呪縛からの解放も不可欠となる。この解放にも、決意の勇気が不可欠である。

氏の「無形生産物」は、「刀田サービス商品」と同様に得体が知れず、これを具体的に捉えられないのは私だけではない。そこで、これが生産とどこがどう違うのか、例えば理髪や教育の事例を以て具体的に説明されることを願いたい。なお、「無形」であると言うことは、説明不能の理由にはならないし、理由にすべきではない。

注(6) 察するに、マルクスは、二種の労働対象を同時に扱ったために、その処理に困り、労働対象には目を瞑り、双方の運輸に共通することを述べたに過ぎない。これに対して、使用価値完成説では、正に運輸対象である貨物に即し、その所在変更によって貨物が使用可能な状態にしたことを物質的生産の一部と正しく捉えている。その反面で、旅客の使用価値完成を論理の射程外としている。これも一種の片手落ちであり、運輸論として不完全である。

しかし、これは簡単に補正される。ここで肝心なことは、人間的諸能力を人間の使用価値と捉えることである。この結果、旅客の運輸は、人間的諸能力としての使用価値の完成である。ただし、旅客と一口に言っても、それには通勤や通学、買物、旅行、等と多様であり、これに即して人間的能力も多様である。多様であるとは言え、運輸によって使用可能とすることは一種の生産である。基本的な違いは対象の違いであり、物質的生産としての運輸とサービス生産としての運輸の二種からなる。そして、これが真の有用効果生産でもある。つまり、完成された使用価値が真の有用効果である。なお、これらについては、他の諸拙稿で何度も指摘している。

(3) 他の諸問題

紙幅の上限に達したので、他の諸問題についてはできるだけ簡単に触れることにする。

① 「労働力生産物擬制説」と労働力商品の中身 労働力は、経済学の中では、労働以上に抽象的であり、最も抽象的な概念である。しかも、これをどう捉えるかは、経済学の根幹に関わる。そこで、飯盛氏に質したい2点がある。1つは、既に見たように、氏によると、労働力は生産物ではないとされている。言うことは、労働力を生産物と捉えることは見做しで、「労働力生産物擬制説」であるのか。また、氏の「労働力は……再生産される」は成立するのか。さらに、「再生産」の帰結としての労働力はどのようにして生産物でないのか。そもそも、生産とはなにか⁽⁷⁾。

もう1つは、労働力商品の中身についてである。つまり、この中身は、労

働力所有権の売買であるのか、それとも労働力占有権の売買（賃貸借）であるのか。氏の見解を待つ。

序に、労働力の価値が労働力の内部に存在しないとする氏の論拠を明示し、その際に金子ハルオ氏の謬見——マルクスの「帰着」に囚われた、マルクス見解の誤読・誤解——との違いも明示されたい。

② 「価値—商品価値」と「価値＝商品価値」 日本でのサービス経済論争は、サービス概念が確立されない中で、したがって転倒的に、生産的労働論においてサービス労働は価値を形成しないとされていたが、それが適切かを巡って出発した。転倒的であるとは言え、このテーマ自体は重要であり、解決されなければならない。そのためにも、価値概念が重要である。飯盛氏を含め、通説的には「価値＝商品価値」、つまり商品固有説であるが、これは何を論拠に、何時からそうなったのかを、博識な氏に伺いたい。

これに対して、マルクスの見解は、『資本論』の冒頭にある「価値——商品価値」に見るように、歴史的二重性の統一説である。これは、本源的な生産的労働をベースとする、合理的なものである。氏の論評を待つ。

序に、氏の「……生産力にかかわる命題である。これに対し価値規定は生産関係の基本をなすもの」(179) とは何を論拠とされているのかを明示されたい。価値の歴史的 성격は生産関係に規定されるが、価値一般は生産力に規定される。したがって、商品価値、そして資本商品価値も多様である。氏の見解を待ちたい。

③ 本源的な生産的労働 歴史的に二重な生産的労働は、氏の「二者闘争性」を含むが、肝心な点は本源的規定をどう捉えるかにある。この労働は、人間的営為の中で人類生存に普遍的かつ根源的に必要なものを意味している。サービスを含むその成果の一面が使用価値であり、他面では価値である。これについても氏の論評を待つ。

④ 折衷説 飯盛氏は、氏とは異なるサービス労働価値形成説を指して、口癖のように、そして今回も「折衷説」(168) を唱えるが、これは理解不能である。少なくとも、私の場合は、上記の②と③を内容としているので、氏の言う「折衷」に心当たりがない。何と何の折衷なのかを明記願いたい。

⑤ 「集团的サービス」論の展開 無い物強請りとなるが、多数者を対象と

する「集団的サービス」について、拙論⁽⁸⁾の批判を含む原理的な展開を願いたい。なぜなら、それは、サービス経済理論を巡る試金石の課題であるが、拙論以外に、金子ハルオ氏の全く成立しない見解や森田成也氏の生半可な記述があるに過ぎないからである。

その際に、情報——陳腐化はするが、その使用によって消滅せず、何よりも多数者に伝達可能である——を以て展開される可能性があるので、予め一言すれば、これは成立しない。例えば、多数の乗客を運ぶ運輸は、乗客を目的地に運ぶのであり、その際の情報は、これがあっても付随的・補助的であるに過ぎない。また、例えばプロスポーツの直接の観戦は、ゲームの展開それ自体を享受し、自己の再生産に役立てるのであり、例えばテレビによるゲーム展開の享受とは異なる。これだけでも、情報による展開が不可能であることは明らかである。なお、一見成立するかに見えるものに情報を扱うマスコミがある。しかし、今回は最早立ち入ることはできないが、これもサービスの生産とその帰結としてのサービスを正しく捉えれば、成立しないことが明らかになる。

⑥ 腐朽性・寄生性 氏は注の(15)において、私には現代資本主義の腐朽性・寄生性の批判が見当たらない旨を指摘しているので、最後にこれについて一言する。ただし、いわば二段構となるので、紙幅を要する。

第1に、現代資本主義の腐朽性や寄生性は、懐かしい言葉である。これについては、他の拙稿⁽⁹⁾でいわば間接的に触れているが、ここで改めて一言する。この腐朽性・寄生性は、レーニンの『帝国主義論』でのそれをベースに、一時期盛んであった全般的危機論や東風压倒西風観を背景に、とくにサービスの「肥大化」を腐朽性や寄生性の典型と見て、そしてサービス労働が不生産的労働、したがって価値を形成しない労働とする見解に結び付けたが、私はこうした見方に与しなかった。なぜなら、現代サービス——とくに知的能力——の発展は、「肥大化」ではなく、資本主義経済を発展させると同時に、その非民主性と歴史的限界の認識を可能にし、新たなシステムの選択に結び付く変革主体形成に有用であると考えたからである。ただし、これらは今回の飯盛氏の関心事ではない。

第2に、飯盛氏の関心事に移る。氏は、「サービス労働価値形成説は第三次産業のうち無形の生産物を生むサービス部門を流通部門（不生産的部門）と

区別して価値生産的とみなすのであり、そ〔区別〕の実践的帰結は現代資本主義の腐朽性、寄生性を……流通部門の肥大化に見ることである……。流通部門は不生産的部門であるから社会的再生産の進行にとって必要不可欠の大きさに抑制されるべきである」(179) と言う。なお、ここでの「サービス労働価値形成説」とは飯盛説のことであり、極めて限定的である。また、ここでの主題である「流通部門」として「(商業、金融、保険、不動産業)」(同前) を挙げている。

飯盛氏は、ここで、流通部門の腐朽性や寄生性に対する批判が私見には欠けていると指摘する。そこで、これについても二段的に触れることにする。まず、流通部門は、サービスを対象とする私の研究対象ではないので、関心の外にあるが、それでも言及が皆無ではない。流通部門はサービス部門ではないが、その生産〔労働〕過程の中にはサービスの要素が多分に含まれていることを、最近の拙稿でも指摘している。

つぎに、氏の言葉尻を捉えることになるが、氏の「流通部門は不生産的部門であるから社会的再生産の進行にとって必要不可欠の大きさに」(同前) は、矛盾している。なぜなら、「社会的再生産の進行にとって必要不可欠な大きさ」のものを「不生産的」とは言えず、況してや腐朽性や寄生性とは言えないからである。氏が指摘する日本での「一九七〇年代前半」や「八〇年代後半」(同前) の特殊な時期のいわば「はみ出し部分」を一般化すべきではない。このはみ出しは、千載一遇に便乗する独占的流通資本の限界を意味するが、独占資本の限界は流通資本に限られない。例えば、かつて頻繁に行われた乗用車のモデル・チェンジとスクラップ化＝資源の無駄遣い——種のはみ出し——も、商業資本に引き摺られてではあるが、独占的生産資本に内在する限界を意味している。とは言え、これが寄生性を別として、直ちに現代資本主義の腐朽性を意味するかは疑問である。なぜなら、資本制では、無駄遣いもその活気の一因をなしているからである。基本的には、「流通部門は不生産的部門である」に問題がある。なぜなら、新しい経済システムでも流通部門は不可欠であり、経済的民主化の担い手になりうるからである⁽¹⁰⁾。

注(7) 生産と生産物は多様に規定される。1 つは、労働対象に変化を与えることとその帰

結である。そして、変化の中身は、対象の質と量、形態、所在の四つからなる。もう1つは、使用対象を使用可能にすることとその帰結である。さらに1つは、生産力要因の結合とその帰結である。労働力の生産や再生産とその帰結は、どの規定にも合致する。

- (8) 最初の体系的記述は、拙著『現代サービス経済論の展開』創風社、2005での第三章であり、後の諸拙稿で精緻化してある。
- (9) 拙稿「サービス労働と家事労働——二宮厚美氏の見解を巡って——」(『経済集志』77巻4号、2008年1月) 37ページ。
- (10) 流通や市場は、生産と消費（供給と需要）が交差する場であり、消費（需要）、とくに個人的消費を含んでいる。自称「社会主義」のソ連、等は、流通部門や市場を本源的に不生産的な部門や場と捉え、その役割を軽視した。この軽視は、理論的にはマルクスの流通過程の位置付けに依拠し、実際的には社会主義と無縁な官僚主義による、社会主義の真髄である「民主」の欠落による。これに対して、市場万能主義あるいは競争至上主義は、いわば「良い物を安く」と言ってみれば一見市場、とくに「民主」を重視しているように見える。しかし、その実態は、生産（供給）と金融における国際的な弱肉強食であり、獲物の強者（富者）への配分である。

現代の課題の1つは、強者の横暴を抑える、不均等発展を考慮した、市場の民主化であり、その模索にある。